

清原頼業論

和 島 芳 男

一

清原頼業は清家中興の祖である。平安時代中期以来、清原・中原両家の各一流が明經の博士家として並び、それぞれ大外記を世襲してたがいに競争したが、鎌倉時代以後清家の勢いがようやく中家をしのぎ、さらに室町時代に清家が宋代新注の学を摂取して家学を一新したとき、頼業はこの新しい清家学の学祖として追慕され、特に「大外記殿」または「大大外記殿」と尊称されたのである。^①

諸系図の伝えるところを綜合すれば、清原氏は天武天皇の後である。天皇の皇子舎人親王の曾孫夏野は清原真人の姓を賜わり、右大臣從二位に昇ったが子がなかったので、同じく天武天皇の五代の孫で、やはり清原の姓を賜わった有雄の孫海雄を養子とし、以後房則・業恒・広澄・頼隆・定滋・定康・祐隆と子孫相継ぎ、広澄以後は歴代大外記に任ぜられ、なお広澄・頼隆は博士、定康・祐隆は助教を兼ねた。頼業はこの大外記兼助教祐隆の子で保安三年（一一二二）に生まれ、保延元年（一一三五）十四歳のとき学に志し、『礼記鄭注』『春秋経伝集解』などにつき父の訓説を受け、康治元年（一一四二）二十一歳の正月には叙爵して少外記に任ぜられた。しかるに翌二年十二月父祐隆は六十九歳で没した。^②若年にして学業がまさにその緒につこうとするとき師であり父である祐隆を失ったのは頼業の不幸であったが、この不幸中の幸いは頼業が当時学識をもって知られた藤原頼長の知遇を得たことであった。

頼長は父前関白忠実の特別の愛情を受け、保延二年（一一三六）十七歳のとき早くも内大臣に任ぜられ、近衛大将も兼ねたが、その後康治元年（一一四二）、「今卿士皆以不_レ学_二経史_一、国家滅亡、豈不_レ宜哉」という見地から学道の振興を志し、まず『左伝』を読んで大いに感ずるところがあり、以後『春秋』三伝の講究には終生最も力を注いだ。翌二年頼長は『礼記』をすでに読了し、そのうちの「檀弓」上下、「学記」

「中庸」の諸編を「殊勝之卷」として重ねて読むことにした。かの劉宋の戴顒たいきやうの「中庸伝」などが当時すでに本邦に伝存したことが確かめられない限り、頼長の「中庸」編評価はかれの創意に基いたものと認むべきであろう。この年頼長はまた易は五十歳以後に学ぶべきであるという俗説を排し、陰陽師安倍泰親に命じて泰山府君を祭らせた上、あえて『周易』を読み、翌年また藤原通憲入道信西から易筮成卦の法を習い、しかもあくる久安元年（一一四五）には卜と筮との先後について信西と論争し、さしも博学の信西をしてついに自説の誤りを認めしめた。このとき信西は頼長に対し、「閣下才不_レ恥_二千古_一」、訪_レ于_二漢朝_一又少_二比類_一、既超_二我朝中古先達_一、其才過_レ于_二我国_一、深所_二危懼_一也、自今以後、莫_レ学_二經典_一矣」という、ほとんど追従に近い賛辞を呈している^③。

清原頼業の名が初めて『台記』に現われるのは、あたかも頼長が自分の学識について満々たる自信を得た久安元年（一一四五）の巻である。

頼長は前年すでに『五経正義』全百八十巻を読破するところから、庚子の日ごとに自邸で経筵を開くことを例としたが、この年二月の条には「廿四日庚子、依_レ例講_二老子経_一、有_レ詩、講師肥前介頼業、説経論義優美、問者俊通、敦綱、共二重」と見え、頼業はこの後も同じ経筵に再三列席して問者または講師を勤めている。しかし何分当時二十四歳の若さであったから、毎度頼長の甘心を得たわけではなかった。たとえばこの年八月二十一日（孔子の生日）の『礼記正義』の論義は仏家の堅義の形を借りて行なわれたが、この際の頼業の問者ぶりについては頼長は「雖_二多才_一、今夜所為不_二優美_一」と評している。また十一月の『周礼』講筵のときの記事に「講師頼業_{其答}如_二泥_一」とあるのは、いかなる意味であろうか^④。

しかしこういう行きづまりは、やがて偶然の機会に打開された。すなわち翌二年三月、頼業は同族直講清原信憲のもとに『周礼疏』の摺本があることを頼長に告げた。かねて図書の収集に努めていた頼長はさっそくこの本の得否について陰陽師安倍泰親にたずねその占に従って頼業を使に立て、かの摺本を手本および他書と交換するよう信憲に交渉させたところ、頼業は首尾よく使命を果たして摺本を携え帰った。これは頼長を大いに喜ばせたに違いない。翌四月頼業が疫疾にかかったとき、頼長は修理大允敦任に命じてこれを見舞わせた。このとき敦任は疫疾の人を見舞うのは俗人の忌むところであるといさめたが、頼長は「頼業有_レ才無_レ所忌、不_レ可_レ過_二今日_一」といい、即日敦任を頼業のもとにつかわして「天来_レ喪_二此文_一、疫神其如_レ汝何」と激励し、翌年十一月には頼業に命じて嫡子師長に『孝経』を授けさせた。この年三月、頼長は一の上の宣旨を受け、同五年七月には左大臣に昇り従一位に叙せられ、翌六年九月には兄摂政忠通に代わって氏の長者となった。このとき頼業は頼長が氏の長者となるべきことは去年三月すでに夢想があった由を頼長に語っている。これは頼長の平常の恩顧に対する頼業の謝意の一端と見るべきで

あろう。事実この数年来頼業は左大臣家の随一の侍として忠勤を励む一方、式日の『老子』『儀礼』『左伝』『孝経』等の講筵に講師・問者として連なるごとに、みずからの学業を積むことができた。たとえば『台記』久安四年（一一四八）十一月十六日庚子の条には、「依例講左伝、講師頼業、問余及俊通、論義四条、講師皆任『釈文』答之、足感嘆」という記事が見える。これによれば頼長の経学研究が大いに進捗して、当時の博士たちも見るに及ばなかった唐の陸徳明の『經典釈文』まで閲読し、自家の経筵においてもこの『釈文』に準拠するよう、頼業を指導していたことが察せられよう。⑦これから二年後の久安六年（一一五〇）十二月の除目において頼業は直講に任ぜられた。これはこの年四月頼長が頼業の申文を奏進させた効があつてのことであり、頼長がこれについて「（頼業の）年齢未長、位階猶卑、而以第抽賞、可謂善政」と評しているのは推薦者の自賛のことばとも受け取られるのである。⑧

翌仁平元年（一一五一）正月、頼長は父忠実の奏請によって内覧の宣旨を賜わり、これがため兄関白忠通とはいっそう不和となった。しかし頼長の学道振興の熱意はその後もしも減退せず、相変らず経筵や購書に精を出す一方同年五月には正に百年ぶりで学問料試を復活し、次いで八月には積奠の晴儀を再興した。この間直講頼業は仁平元年八月初めて積奠の座主となり、同十一月には左大臣頼長の使として孔子廟におもむき、頼長の内覧および長者の慶びを申し、翌二年八月の積奠にも再び座主を勤めた。⑨これらのことの間に頼業自身の学問的意欲ももちろん増進されたに違いない。旧徴古館本『古文尚書』（写本十三卷、正和二年清原長隆点）卷十三の本奥書に「仁平元年六月廿五日申剋、以少納言入道（信西）摺本之釈文『見合了』」といい、書陵部蔵旧金沢文庫本『春秋経伝集解』卷三十の奥には、

仁平四年三月十九日酉刻重説合了、（中略）鄙生年齢十四初志『学業』、二十年来浮沈此道、諸経之中、殊嗜『斯文』、早雖『伝』先考之説、未『能散』当时之疑、但背之後無『便』擊蒙之間、去久安六年（一一五〇）窮冬適拜儒、耽思弘道、仍或校『古本』、或擬『正義』、粗加愚案、頗改『旧誤』、就中無『正義』之所々尋勘本、未『聊加』粉黛、來楷後昆莫『加』嘲矣、

朝散大夫国子学都講（直講）防州別駕清原 御判（頼業）

と記し、なお建仁寺兩足院蔵梅仙東逋筆『礼記鄭注』卷十六（中庸編）の奥に「久寿二年（一一五五）正月十一日午剋、以或本并正義『見合畢』、此篇非『唯』尽一部之奥旨、又是足諸経之要道耳」と見えることなどによって考えれば、頼業はかつて頼長から『左伝』の講究に際して教えられたところを『古文尚書』の場合に応用してこれも『釈文』と校合したこと、また『五経正義』を読破した頼長の熱心に刺戟された頼業が、

五経のうち頼長の最も愛読した『春秋左氏伝』についてまずある古本と『正義』とによって『春秋経伝集解』の家本の校定に努力したこと、そしてこの『正義』との校定は『礼記』についてもこれを行ないながら、「中庸」観においてはこれまたかつて頼長から教えられたところを忠実に継承したことなどを推察し得るのである。

頼長と頼業とのこのような師弟関係がなお続いたならば、頼業が学者として大成する道もそこから開けたことであろう。しかるにこの久寿二年（一一五四）七月、近衛天皇の崩御により左大臣頼長の内覧はとどめられた。九月、頼長は新帝に召し出さるべき吉夢を得、頼業を使として春日社に奉幣した。翌十月の左大臣家の講筵に頼業はまた講師を勤めたが、『台記』に見える頼業の奉公はこれが最後であり、事態はさきの吉夢に反してさらに悪化し、頼長は先帝呪咀の疑いを受けて苦境に陥り、翌保元元年（一一五六）七月鳥羽法皇崩御の後、崇徳上皇の御所白河殿に投じ、十四日奈良坂において運命ついに窮まったのである。^⑩時に頼長は三十七歳、頼業は三十五歳であった。

註

① 『庸富記』享徳三年二月十八日条。同四年閏四月十四日条。

② 頼業の学業については建仁寺両足院蔵『礼記鄭注』（梅仙東逋手写本、二十卷二十冊）卷二十および宮内庁書陵部蔵『春秋経伝集解』（旧金沢文庫本、写本三十卷三十軸）卷三十の頼業の本奥書参照（後者は本稿第一節に全文引用）。叙爵任官の事は『本朝世紀』康治元年正月五日、十七日、二十三日条、祐隆卒去の事は同書同二年十二月十九日条による。

③ 藤原頼長の好學、その藤原通憲入道信西との学問的交渉については拙著『日本宋学史の研究』（吉川弘文館、昭37）第一編第二章および同『中世の儒学』（同昭40）第一の三において主として頼長の日記『台記』によって詳述した。本稿はその要約である。

④ 頼長と頼業との関係についても注3と同断。

⑤ 『台記』久安二年三月十一日、四月十四日、同三年十一月一日、同六年九月二十六日条。

⑥ 同久安四年十月六日条。

⑦ 『台記』によれば頼長が『經典釈文』巻一を読み終ったのは康治元年八月二十三日のことである。

⑧ 『台記』久安六年四月二日条。同十二月二十二日条。

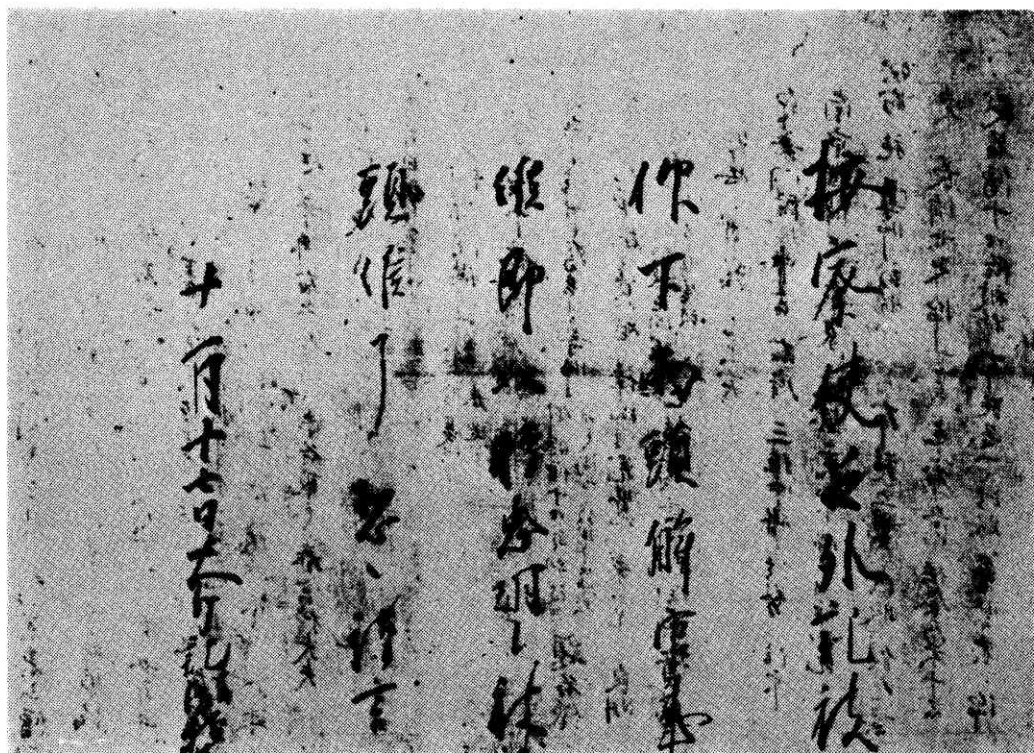
⑨ 『台記』『字槐記抄』および前掲拙著二部参照。

⑩ 頼長の悲劇的運命については拙稿『藤原忠通と藤原頼長』（『平安王朝—その実力者たち』所収、人物往来社、昭40）参照。

保元の乱の後、左大臣頼長は墓をあばかれ、その遺子たちはそれぞれ配流されたが、朝廷が前関白忠実の罪を議したとき、関白忠通はいち早く氏の長者の宣下を受け、摂関家の所領をすべて伝受するとともに、忠実が洛北知足院に閉居することをもってその処分を打ちとめた。これは自家の保全のためには父子の宿恨もあえて忘れる利巧な措置であった。^①左大臣家の侍清原頼業には何のところがめもなかった。乱後三箇月を経た保元元年（一一五六）十月、記録所が復置され寄人十二人が命ぜられたとき、頼業は文章博士藤原長光・大外記兼助教中原師業・左大史小槻師経・治部権少輔藤原俊経・算博士三善行康・助教中原師元・散位小槻永業に次いで八番目に「直講兼周防介清原真人頼業」と名をつらね、なお右大史三善為信・西市佐惟宗成直・明法博士坂上兼成・同中原業倫の四名がこれに続いている。そして翌十一月頼業は助教に進められ、あくる二年正月には従五位上に昇叙された。^②しかしこの後十年間の頼業の伝記は明らかでなく、わずかに二種の史料を得るのみである。その一つはかの『古文尚書』卷十三の本奥書に「応保二年（一一六二）四月廿六日、見合或古本了」という後文であり、これによって頼業が引続き家本の校定を進めていたことを察知できよう。いま一つは『長寛勘文』^③所載長寛二年（一一六四）四月廿四日助教頼業の勘文二通である。これは先年甲斐守藤原忠重らが熊野社領である同国八代荘を侵略した事件に関し、明法博士中原業倫が勘進した忠重の罪案を決するために、熊野社が大神宮と同じく大社であるか、ひいて両社が団体であるか否かを確かめる必要を生じ、更に諸家の勘文を徴したときのものである。このとき刑部卿藤原範兼・大外記兼博士中原師元・式部大輔藤原永範・文章博士藤原長光は国史・神典により熊野社の祭神が天照大神の母伊弉册尊であることを論拠として伊勢・熊野を団体と主張したが、太政大臣藤原伊通はこれを疑い、頼業も『日本書紀』『同私記』『先代旧事本紀』『延喜式』『国史日記』等を引き、これらの記載によつては伊弉册尊を熊野権現と定め難く、よし熊野・伊勢に母子の儀があつても、それによつてただちに両者を同格・団体とすべからざることを論じ、「加之神宮者、禁断私幣、忌憚仏事、熊野者、不嫌民庶、容受縉徒、其風乖違、其礼懸隔者」と指摘した。このような文献的考証もまた、かつて「予聊遊心於漢家之經史、不停思於我朝之書記」と反省し、旧記の類集・抄録に努め、『類聚三代格』の索引も作った左大臣頼長の考証学を継いだものと見るべきであろう。^④そしてそれは中原家と並んで博士の家であるとともにまた外記の家でもある清原家の当主にとって当然必要な勉強に外ならなかったのである。

清原家では早く関白頼通のとき頼業の高祖父頼隆が局務となったが、その後中原家に「近世尤物也」と称せられた師遠が出、入道前関白忠実の信任を得て局務となつて以来、師遠の子師安・師元が相次いで局務に上り、この間清原家はようやく振るわず、ことに頼業の父祐隆の没後は大外記が二人ながら中原家の出身である時期が続いたようである。しかるに仁安元年（一一六六）、あたかも平氏政権の開幕の年、頼業の名が十年ぶりに記録に現われたときには正に大外記の職名を帯び、しかも中原師元の子大外記師尚の上座としてその年十一月の任大臣節会にも連なっている^⑥。時に頼業は四十五歳、師尚は三十八歳である。翌二年九月には五条内裏が炎上し、あくる三年十二月には大神宮が焼亡した。これらの異変に際し頼業が進めた勘文や諸公事に関するかれの的確な意見は当時の右少弁平信範や右大臣藤原兼実の日記に多く採録されているが、中にも頼業の局務としての器量をよく示したのは承安二年（一一七二）の宋使来貢に関するかれの所見であろう。この年九月宋の明州の刺史が後白河法皇・平清盛に方物を進めたが、その注文には「賜_ニ日本国王_一」「送_ニ太政大臣_一」とあり、朝議はこれを「頗奇恠」としながらも、にわかにもその措置を決するには至らなかった。これにつき頼業は兼実の問いに答えていう、昔朱雀院のとき唐朝から公家および左右大臣に贈物があつたが公家の分は返却し、両大臣の分のみ留めた。後一条院のときにも異国の供物があつたが、その牒状に主上の御名を載せてあつたので、ただちにこれを却下した。その後承暦年間にもまた同様の事があり、その牒状に「廻_ニ賜_ニ日本国王_一」と書いてあつたのに、この処分について再三諸道に問い、二三年経過したため時人の非難を招いた。今度の供物はかの国の国王でなく一刺史の進めるものに過ぎない上にその書辞も奇怪ゆえ、さっそく返遣さるべく、無音に留められては異国のおもわくもいかであろうかと。

兼実は右の頼業の意見を日記に詳記し、「尤可然」と注している^⑧。しかし日宋通交についてはすこぶる積極的であつた平氏の政権下の時世とて、頼業の意見は用いられる由もなく、翌年三月、朝議はついに方物受納に決し、法皇より贈物を宋使に授け、また清盛に勅して返牒を作らせられた^⑨。しかしこの一件は頼業にとっては右大臣兼実はじめ多くの朝臣たちの信任をますます厚うする機縁となつたらしい。安元元年（一一七五）九月の『玉葉』には頼業がついに博士に任ぜられたことについて、「明経博士頼業、是世之所推也」と特筆されている。その後同三年三月頼業はまた右大臣家に候し、公事の条々について兼実の質問に応じ、兼実をして「咄_ニ和漢之才_一、談_ニ天下之動靜_一、其才可謂_ニ神_一、可貴々々」と感嘆せしめた。このとき頼業はなお経書にいう天変に二義があることを述べ、「世之衰微、逐日速疾、可恐可悲」と嘆息した^⑩。たまたま翌四月京都に大火が起つて大内裏以下二万余家を焼き、災死者数千人を出し、六月にはかの鹿ヶ谷の陰謀があらわれて物情いよいよ騒然となつ



『兵範記』紙背

清原頼業自筆文書

(近衛元公爵家蔵)

按察使召_レ外記_二被

仰_二下_レ両頭解官事_一

候即以_二時忠朝臣_一被_レ補

頭候了恐々謹言

十一月十七日

大外記清原頼業

この文書は兵部卿平信範の日記『兵範記』自筆本の紙背にある。同記仁安元年(一一六六)十一月十三日および十六日条によれば藏人頭藤原朝方・同藤原実家は五節に奉仕しなかったので職をとどめられた。よって按察使大納言藤原公通が旨を奉じ、外記を召して両藏人頭解官の事を宣下し、右中弁平時忠をもって藏人頭に替補した。よって大外記頼業から右の次第を当時の左少弁信範に報じたのがこの文書であり、信範はこれを裏返して日記に用いたのである。仁安元年は頼業の大外記就任の初年で四十五歳のときである。ちなみにいま一人の藏人頭には同月十七日太皇太后宮権亮藤原実綱がこれに補せられた。

た。世上にはこれらの災変をもって保元・平治以来の怨靈の所為と考える向きがあり、七月二十九日讃岐院に崇徳院の追号を奉り、左大臣頼長に正一位太政大臣を贈った。このときなおかの崇道天皇（桓武天皇廢太子早良親王）の例にならない、崇徳院のために国忌・山陵を置く議もあったが、十陵がすでに固定した今は新たに山陵を加える余地なく、廢太子の前例を太上天皇たる崇徳院に準用しても尊崇の義をなさないという頼業の意見によってたちまち停止されたという。^⑪これも兼実の支持があつてのことと思われる。

註

- ① 拙稿『藤原忠通と藤原頼長』（第一節注10参照）。
- ② 『兵範記』保元元年十月十三日条。同二年正月二十四日条。『山槐記』保元元年十一月二十七日条。同二十八日条。
- ③ 『新校群書類従』卷二十所収。
- ④ 『台記』康治元年十二月三十日条。同久安四年四月十六日条。
- ⑤ 『尊卑分脈』。『江談抄』二、大外記師遠諸道兼学事。
- ⑥ 『山槐記』永万二年七月二十七日条。『兵範記』仁安元年十月十五日条。同十一月十一日条。
- ⑦ 『兵範記』仁安二年九月二十七日条。同十月九日条。同三年十二月二十九日条。同四年正月十二日条。『玉葉』仁安四年正月一日、二日、三日各条。
- ⑧ 『玉葉』承安二年九月十七日条。同二十二日条。
- ⑨ 『玉葉』承安三年三月十三日条。『百鍊抄』同三日条。
- ⑩ 『玉葉』安元三年三月七日条。
- ⑪ 同書同年八月二十八日条。

三

治承三年（一一七九）十一月七日之夜、大地震が起り、人心不安の折柄、五条河原に頭一つ、手足各四本の異児が発見された。頼業はこれを謀反・遜位等の徴と勘進した。^①果たして十四日、清盛が兵数千を率いて福原からにわかに入京し、翌日法皇に奏請して基房の関白を免じ、基通を内大臣に任じて関白とし、次いで太政大臣師長以下、法皇に親近した朝臣三十九人の官職を停止した。いわゆる治承の政変である。大外記頼業は幸い無難で、この際穀倉院別当に兼補された。^②翌四年二月安徳天皇御受禪、四月御即位、次いで六月には後白河法皇・高倉上皇とともに摂津福原に移御された。頼業もこれに供奉して西下したが、八月はじめ釈奠の用務を兼ねて上京、兼実に謁し、新都造営の進捗遅々たる実情を

語った。このとき頼業は『嵯峨隱君子算道命勘文』なるものを引照し、昔貞観のころ大極殿炎上するとき、世人はこれを遷都の時期到来の徴かと疑ったが、隱君子はこれについて、桓武聖主が平安京を営まれたのは、その地相が永代の帝都たるにかなうからであり、すなわち天の成せる所であって算術や人意によって改めらるべきではないと戒めたとあるという伝承を紹介した上、頼業自身の所見として、「而今有遷都之儀、我朝若有運者此事不可遂、我朝若可尽者此事可成就、歟、国之安否只在此、事遂可見歟」と述べ、なお新院・中宮ともに遷都につき不吉の御夢想があったにもかかわらず、「不信此等靈告、猶被營新都、誠是天魔所為不可疑、可悲々々」と嘆いた。^③

遷都のことは右大臣兼実ももとより反対であった。そもそも兼実はさきの政変により基房に代わって執政となるべきところ、年少の基通が関白となり、次いで新帝の摂政となったことにあきたらず、あくまで京都にとどまり、大嘗会が旧京において行なわれる日を待望した。しかるに福原ではこの大札を新京であげるため内裏の造営を急ぐこととし、今年八月再三諸臣を会してこの事を促進した。このとき大外記中原師尚は孝謙天皇が離宮において大嘗を行なわれた旧例を引き、大札を福原であげてもらえなかつたといふと述べたが、左大史小槻隆職は期日すでに切迫のとき急に沙汰されては神事も遅れ、かえって違式となろうと指摘し、大外記頼業も延期説を固執したので結局本年は大嘗会を延引することに決定された。^④ 続く十一月の「還都」はもとより兼実一人の喜びではなかったが、「天下之所詠歌」に直面した平氏の焦慮は翌十二月の南都焼討となつて暴発した。兼実はその情報を日記に載せ「余聞此事、心神如屠」「怒生而逢此時、宿業之程、来世又無憑歟」と痛嘆している。^⑤ 翌五年正月、高倉上皇御大漸のとき、前右大将宗盛を五畿内ならびに伊賀・伊勢・近江・丹波等の諸国の総管とすべき宣旨を下す議があつた。これにつき頼業はひそかに兼実に謁し、昔淡路の廢帝のとき惠美の大臣がこのような官を置いたが、この先例はよろしからず、特にこのようになるとに宣旨を下されるのは後世の批判も恥ずべきであるから、ただ摂政の使をもつて仰せ下さるべきであらうと進言したが、兼実は「此事、頼業申状、一旦可然、但近代之事、不及是非」と、すこぶる弱氣であつた。そして日記の下文には、「後聞、総管之宣旨、猶被下了云々」と見えている。^⑥

入道相国清盛の死去はこの後四十余日を経た閏二月四日のことであり、諸国の源氏の氣勢はいよいよ揚がった。この年九月宗盛が使を頼業に送り、「天下事、於今者武力不可叶、可廻何計略哉」とて、大神宮臨時祭・八万四千基塔造立の外いかなる善政を行なうべきかと問わせたが、頼業は「他人難申左右」「偏可在御意」「但變當時之政、可被試歟」などと答え、右の問答の趣をさっそく兼実に伝えた。^⑦ 平

家の都落ちの危機は頼業もすでに予見していたからであろう。翌二年正月、火星が歳星を犯した。頼業はこれは治承の変のときと同じ天変であり、執政が慎しむべき徴であるといった。^⑨この年源義仲の兵が平軍を北国に破り、翌寿永二年（一一八三）には京都に迫った。七月内大臣宗盛以下平氏一族は安徳天皇と神器を奉じて西走、木曾勢が京都を占領、八月には法皇の詔により後鳥羽天皇が神器なくして踐祚された。『玉葉』八月十日条には頼業が兼美に謁し、「上御沙汰違乱之上、源氏等悪行不止、天下忽欲滅亡、可_レ悲々々」と「拭_二紅涙_一、摧_二丹心_一」いたことを「賢哉々々」と称揚している。この年十一月後白河法皇は法住寺殿に武士を集められた。兼美はこの御軽拳をいさめたが時すでに遅れ、十九日には義仲が法住寺殿を襲い、次いで法皇に請うて師家（十二歳）を内大臣・摂政として基通に代え、院の近臣四十余人を解職した。この際兼実はこの武断政権によって執政にあげられなかったことをみずから幸いとしたが、頼業はその子近業の戦死という非運に際会したのであった。^⑩

註

- ① 『山槐記』治承三年十一月九日条。
- ② 同書同年同月十七日条。
- ③ 『玉葉』治承四年八月四日条。
- ④ 『統日本紀』天平勝宝元年十一月乙卯条。
- ⑤ 『玉葉』治承四年八月二十九日条。
- ⑥ 同書同年十二月二十九日条。
- ⑦ 『百鍊抄』養和元年正月八日条。『玉葉』治承五年正月十九日条。
- ⑧ 『玉葉』治承五年九月三十日条。
- ⑨ 同書二年二月十七日条。
- ⑩ 同書永二年十一月十八ないし二十二日条。二十一日条には「余密々祈請、今度義仲若行善政者、余当其仁、此事無極不祥也、仍今度事、不可入其中、不可順義仲之間、聊謝仏神了、莫言々々」とある。

四

頼業は大外記として多端な公務にあずかる間にもその明経家としての本来の面目を失わず、常に家本の点校に努め、福原祇候中にも読書を怠らなかった。たとえば京都大学蔵清家文庫本『毛詩鄭箋』（重文）巻一の奥に、

承安四年（二七四）九月十九日朝間、詰老眼「加仮字反音等」了、毛鄭之說既以分別、好事之徒、何不悦目乎、

大外史清判

とあり、書陵部蔵旧金沢文庫本『春秋經伝集解』卷十八の尾にも、

治承四年（一一八〇）仲冬十日、於撰州重見「合家本」畢、于時関東兵起、称「義挙」、台岳恃乱、勸還都、鶴髪前儒独嗜「左史」、

類「杜預之居襄陽」也、醉後之狂筆而已、

大外史在御判

と見える。頼業はまた早く家業の後継につき考慮し、さきに嘉応二年（一一六九）『礼記鄭注』の家説をその子近業に伝えたが、近業が院の北面に仕えたので、その後は近業の弟良業を家嫡と定めたらしく、右の福原祇候中から翌年にかけては『春秋經伝集解』養和二年（一一八二）には『礼記鄭注』の秘説を良業に授け、元暦元年（一一八四）には重ねて『春秋』について伝授し、この年十一月には良業を右大臣家に伴っている^①。

これよりさき治承四年（一一八〇）以来、右大臣兼実頼業から『帝王略論』を借覧する一方、家蔵の『貞観政要』『群書治要抄』に頼業の加点を求め、同五年九月には、いまだ『三略』を見たことがないという頼業のために、同書の家蔵本を取出して閲覧させた^②。その後寿永二年（一一八三）十一月、兼実はその二子良通・良経のために頼業を召して教授せしめた。『玉葉』にいう。

十四日^{甲辰} 天晴、大外記頼業来、大将（良通）、中將（良経）両息共受「始尚書於頼業」、是非兼日之支度、臨期所思立也、

頼業於「明経道」、不恥「上古」之名士也、仍為令受「習其説」也、

院の御所にはせ参じた直講近業が流れ矢に当り、三十二歳で討死を遂げたのは、これからわずか数日後のことであつた^③。しかし義仲も二箇月後の同三年正月早くも栗津で敗死し、基通が関白に復した。この年八月大外記中原師尚を自邸に召した兼実はその印象を「云才漢云器量」、不「及頼業一歎」と記している。頼業はこの知己に答え、翌元暦二年（一一八五）良通に『尚書』『左伝』を授け、また兼実のために『三略』を講じた^④。

この年三月、平氏がついに西海に滅んで以来世はすべて源氏の白旗になびき、十一月頼朝奏請の守護・地頭設置も勅許された。そして年末に至って右大臣兼実の内覧の宣旨を賜わり、翌文治二年（一一八六）三月にはようやく待望の摂政の詔と氏の長者の宣下を拝した。大外記頼業が摂政家の家司に加えられたのはこの翌日のことであり、時に兼実は三十八歳、頼業はすでに六十五歳であつた。あくる三年三月左大臣藤原経宗

以下二十余名に院宣を下して直言を求められたとき、大外記清原頼業・同中原師尚・左大史小槻広房は「已上三人、令_レ勘_二申聖代徳政之例_一、其次可_レ載_二今案_一旨趣也」として特に人数に加えられた。この際頼業が進めた封事を内見した摂政兼実は「和漢之才、実可_レ謂_二博覧_一者歟」という評語を日記に載せたが、その内容には触れていない。

翌四年、思いがけぬ不幸が今度は兼実を見舞った。嫡子内大臣良通は学業著しく進み、前年もみずから『漢家帝王系図』を作って頼業を感嘆させたが、この年二月二十二歳で急死したのである。^⑦その後頼業は進んで次子良経の教育に当った。『玉葉』四月二十二日条には「密々二位中将（良経）始読_二論語_一於_二大外記頼業真人_一、件人為_二内府（良通）之師匠_一、恋_二其遺位_一、所_レ庶_二幾此事_一也、余又敢不_レ忌_レ之、只悦_二逢_二名士_一而已」とある。たがいに愛子を失った主従の情愛がしのばれてあわれである。『玉葉』の頼業関係記事は文治五年（一一八九）四月九日条の「今日大外記頼業持_二来御元服雜例一卷_一、留_レ之」が最後であり、『清原系図』によれば頼業はこの年閏四月十四日、六十八歳で卒去した。家業は良業が継ぎ、やがて大外記・博士に上っている。

註

- ① 建仁寺兩足院藏『礼記鄭注』卷二十および書陵部藏『春秋経伝集解』各巻奥書。『玉葉』元暦元年十一月十四日条。
- ② 『玉葉』治承四年八月四日、十一月二十九日、同五年九月三十日条。
- ③ 『玉葉』寿永二年十一月二十二、二十四、三十日条。『皇帝紀抄』一院条。『清原系図』。
- ④ 『玉葉』元暦元年八月二十七日、同二年正月二十九日、同四月二十九日、同六月三日条。
- ⑤ 同文治二年三月十六日条。
- ⑥ 同書同三年三月四日、四月十九日条。
- ⑦ 同書同三年五月十四日、同四年二月十九、二十日条。

五

享徳三年（一一五四）二月権大外記中厚康富が頼業十二代の孫前少納言業忠から清原家の学問について聞いた話の中に、「又中庸註事、以_二本経_一為_二家説_一、不被_レ執_二新註_一之由事、仁安比（二六六―六九）有_二大外記殿（頼業）奥書_一、伴年当_二淳熙己酉（十六年一一八九）_一也、朱熹新註未_レ渡時節也、自然相_二叶道理_一、奇特之至也」という一節がある。^①仁安ごろの大外記すなわち頼業がかつて頼長に教えられて『礼記』を読

み、その中庸編の価値を認めたことは事実であるが、その頼業がすでに新注を知り、しかもその執るべからざることを奥書したという写本がもし伝存すればそれこそ「奇特之至」であるし、仁安を淳熙に比照するのも大きな誤りである。しかるに業忠の孫宣賢の手抄『大学聴塵』の章句序の条には「後宝寿院（業忠）法名常忠 予祖父也ココヲ御講談ノ時御落涙アリ、常忠十二代祖頼業号大外 記殿、礼記ノ中カラ此篇（大学篇）ヲ抄出シテ、是ハ後ニ重宝ト成ラント云リ、後ニ此書別ニ一卷トシテ唐ヨリ日本ニ渡ル、意気相感、如合符節、奇妙々々」と載せている。このように本邦の学庸研究における頼業の先駆者の業績がしきりに強調されるのは、かの南北朝以来流行の禅林の宋学に対抗して、清原氏の家学の伝統的權威の保持に努めた業忠の計略に由来したことであつたろう。^③ ちなみに、頼業が死後冥官となり、その墓前を過ぎる車の轅を折損したという靈異も、業忠が康富に語ったところであつた。^④

ただこうして頼業が清原氏の学祖の地位に押し上げられる場合にも、「大博士殿」とは呼ばれず、「大外記殿」と称せられたのは、頼業が左大臣頼長・摂政兼実という大立物の信任を得た上にその局務の労も二十四年の長きにわたつたので特に政事に貢献するところ多く、しかもその才幹・器量とも同僚中原師尚をしのご、中家に対する清家の優越を招来したからであらう。しかし同じく信任といつても、その仕方と内容とについてみれば、頼長の場合と兼実の場合とは同日の談ではなかつた。まず頼長は頼業にとっては厳格な師父であつた。それは経史の学の振興によつて国家の滅亡を救おうという頼長の哲人政治的理想に根ざしたことであり、この理想のゆえに頼長はみずから学問に励むとともに頼業にも経学研究に必要な基礎的訓練を充分に与えた。それにかの「悪左府」の異名の由来となつたほどの頼長のひたむきな、たくましい実践力もまた若き日の頼業に深い感銘をのこしたことであらう。惜しむらくは頼長は執政の日を待たずして非命に倒れ、かれの理想政治のために頼業が貢献すべき機会もむなしく去つた。しかしその後十年、頼業が大外記の実力をたくわえたころ第二の知己を得たのは、やはり頼業の幸いであつた。ただし兼実は頼業を学問的に啓発する師ではなく、むしろこの年長の局務の経験を推重し、その博識に傾倒するひいきであつた。それに兼実は政治家としては現実主義的であり、法皇権が武士を利用する一面かえつて武士に利用されるところに乱世の原因を見いだし、法皇には忠言を呈し、武士には抵抗を示した。この点については頼業はかなり積極的に同調した。しかし兼実には頼長ほどの根性はなく、法皇をはばかりながら結局頼朝の支持を得て執政の宿望を遂げ、一種の公武合体を実現したことは、頼業にとってはやはり失望であり幻滅であつたように思われるのである。

晩年の頼業が「宇治左大臣」の思い出を兼実語り、特に頼長が太政大臣藤原伊通・少納言入道信西と並んで「支_ニ外記之事」^⑤えた功績を追懐したことが『玉葉』に見えるが、これに関連して思い浮かぶのは『古今著聞集』に伝える左の話である。^⑥

中御門左大臣家（藤原経宗）へ大外記頼業は常に参じけり、参るたびごとに必ず瓶子一、肴物を座の前にをかけければ、しばし公事の物がたり申しては、みづからかたづけのみつつ、ひねもす祇候しけり、罷出ざまに障子のかみ刃にて、あはれ一上やとたびごとに申ける、いと興ある事也、

中御門左大臣藤原経宗は右大臣兼実と並ぶこと二十年、精励と年功とによって廟堂に重きをなしたが、文治元年（一一八五）十月頼朝追討の宣旨を義経に下されたとき、その上卿であったため頼朝の嫌忌を招き、同年十二月頼朝の奏請により議奏公卿が置かれた際、一の上でありながらその列に入らなかった。経宗は一たん辞職を考えたがついに屈せず、同三年三月院宣により卿相の直言が求められたとき、武刃の横暴を摘発してはばからなかった。摂政兼実はこの事を日記に載せ、「今夕左大臣（経宗）意見到来、武士濫行事、委注_ニ申之、万人憚而不_レ申之、元老之臣、猶可_レ謂_レ直者歟」と感嘆している。^⑦頼業がこの経宗のもとに常に参じ、酒肴を前にして大いに公事を談じたのは、現実主義の兼実には時に求め難い直情を経宗に見いだして敬愛を感じるとともに、同じく一の上であった旧主悪左府のおもかげをこの経宗に追うことに、ひそかな喜びを覚えたからではなからうか。こういう想像をめぐらしながらこの話を読み直してみると、「あはれ一上や」の一句はなかなか意味深長であり、それだけでも「いと興ある事」と感ぜられて来るのである。

註

- ① 『康富記』享徳三年二月十八日条。
- ② 写本一冊。大東急記念文庫蔵。
- ③ 『承応遺事』に「高倉院の御侍誦に清原頼業をめされけれども殿上はゆるされず、砌に立て授け奉れり、然るに其時頼業寵を得て、礼記の中より大学・中庸を抽出し教奉るといふは近きころの造言なり、一己の私を以て世を欺くは禁止すべしと仰ありけり」という後光明天皇の聖断を載せている。
- ④ 『康富記』享徳四年閏四月十三日条。
- ⑤ 『玉葉』元暦二年四月二十九日条。なお『台記』久安三年六月十七日条には頼長が外記日記を書かせたことが見える。
- ⑥ 『古今著聞集』十八、飲食。

⑦ 『玉葉』 文治元年十二月二十三日、二十七日、同三年三月四日、同四月二十四日条。『愚管抄』五。

(昭和四十六年八月三日稿)

(附記) 清原頼業に関する文献としては故向居淳郎氏の『清原頼業伝』(『日本史研究』三、昭22)が最も精細であり、本稿も史料の面での伝記に負うところが多い。なお写真・資料の調達・閲覧については大手前女子大学長中村直勝博士・京都嵯峨車折神社宮司高田勝次氏の御配慮にあずかった。ここに記して謝意を表する次第である。